第三講《小説1》ビフォア・アフターの対比〈選択肢中心〉

次の文章は、岡本かの子の小説「鮨」の一節である。本文中に登場する子供は、魚や肉などを食べると身が穢れるような気がして、無理に食べると吐いてしまうほどであった。本文はそうした子供に、母が鮨を握って食べさせる場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

その翌日であった。母親は青葉の映りの濃く射す縁側へ新しい茣蓙を敷き、俎板だの庖丁だの水桶だの蝿帳(注)だの持ち出した。それもみな買い立ての真新しいものだった。

母親は、自分と俎板を距てた向こう側に子供を座らせた。子供の前には膳の上に一つの皿を置いた。

母親は、腕捲りして、薔薇いろの掌を差し出して手品師のように、手の裏表を返して子供に見せた。それからその手を言葉と共に調子づけて擦りながら云った。

「よくご覧、使う道具は、みんな新しいものだよ。それから拵える人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗ってあるよ。判ったかい。判ったら、さ、そこで――」

母親は、鉢の中で炊きさました飯に酢を混ぜた。母親も子供もこんこん噎せた。それから母親はその鉢を傍らに寄せて、中からいくらかの飯の分量を掴み出して、両手で小さく長方形に握った。

蝿帳の中には、すでに鮨の具が調理されてあった。母親は素早くその中からひときれを取り出してそれからちょっと押さえて、長方形に握った飯の上へ載せた。子供の前の膳の上の皿へ置いた。玉子焼き鮨だった。

A「ほら、鮨だよ、おすしだよ。手々で、じかに掴んで食べても好いのだよ」

子供は、その通りにした。はだかの肌をするする撫でられるようなころ合いの酸味に、飯と、玉子のあまみがほろほろに交じったあじわいが丁度舌一ぱいに乗った具合い――それをひとつ食べてしまうと体を母に抛りつけたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた香湯のように子供の身のうちに湧いた。

子供はおいしいと云うのが、きまり悪いので、ただ、にいっと笑って、母の顔を見上げた。

「そら、もひとつ、いいかね」

母親は、また手品師のように、手をうら返しにして見せた後、飯を握り、蝿帳から具の一片（ひときれ）を取りだして押しつけ、子供の皿に置いた。

子供は今度は握った飯の上に乗った白く長方形の切片を気味悪く覗（のぞ）いた。すると母親は怖くない程度の威丈高になって

「何でもありません、白い玉子焼きだと思って食べればいいんです」

といった。

かくて、子供は、烏賊（いか）というものを生まれて始めて食べた。象牙（ぞうげ）のような滑らかさがあって、生餅（なまもち）より、よっぽど歯切れがよかった。子供は烏賊鮨を食べていたその冒険のさなか、詰（つ）めていた息のようなものを、はっ、として顔の力みを解いた。うまかったことは、笑い顔でしか現さなかった。

母親は、こんどは、飯の上に、白い透きとおる切片をつけて出した。子供は、それを取って口へ持って行くときに、脅かされるにおいに掠（かす）められたが、鼻を詰まらせて、思い切って口の中へ入れた。

白く透き通る切片は、咀嚼（そしゃく）のために、上品なうま味に衝（つ）きくずされ、程よい滋味（じみ）の圧感に混じって、子供の細い咽喉（のど）へ通って行った。

「今のは、たしかに、ほんとうの魚に違いない。自分は、魚が食べられたのだ――」

そう気づくと、子供は、はじめて、生きているものを噛み殺したような征服と新鮮を感じ、B あたりを広く見廻（みまわ）したい歓びを感じた。むずむずする両方の脇腹（わきばら）を、同じような歓びで、じっとしていられない手の指で掴み掻（か）いた。

「ひ　ひ　ひ　ひ」

無暗（むやみ）に疳高（かんだか）に子供は笑った。母親は、勝利は自分のものだと見てとると、指についた飯粒を、ひとつひとつ払い落としたりしてから、わざと落ちついて蝿帳のなかを子供に見せぬよう覗いて云った。

「さあ、こんどは、何にしようかね……はてね……まだあるかしら……」

子供は焦立（いらだ）って絶叫する。

「すし！　すし」

母親は、嬉しいのをぐっと堪える少し呆けたような――それは子供が、母としては一ばん好きな表情で、生涯忘れ得ない美しい顔をして

「では、お客さまのお好みによりまして、次を差し上げまあす」

最初のときのように、薔薇いろの手を子供の眼の前に近づけ、母はまたも手品師のように裏と表を返して見せてから鮨を握り出した。同じような白い身の魚の鮨が握り出された。

母親はまず最初の試みに注意深く色と生臭の無い魚肉を選んだらしい。それは鯛と比良目であった。

子供は続けて食べた。母親が握って皿の上に置くのと、子供が掴み取る手と、競争するようになった。その熱中が、母と子を何も考えず、意識しない一つの気持ちの痺れた世界に牽き入れた。五つ六つの鮨が握られて、掴み取られて、食べられる――その運びに面白く調子がついて来た。素人の母親の握る鮨は、いちいち大きさが違っていて、形も不細工だった。鮨は、皿の上に、ころりと倒れて、載せた具を傍らへ落とすものもあった。C子供は、そういうものへ却って愛感を覚え、自分で形を調えて食べると余計おいしい気がした。子供は、ふと、日頃、内しょで呼んでいるも一人(注)の幻想のなかの母といま目の前に鮨を握っている母とが眼の感覚だけか頭の中でか、一致しかけ一重の姿に紛れている気がした。もっと、ぴったり、一致して欲しいが、あまり一致したら恐ろしい気もする。

自分が、いつも、誰にも内しょで呼ぶ母はやはり、この母親であったのかしら、それがこんなにも自分においしいものを食べさせてくれるこの母であったのなら、内密に心を外の母に移していたのが悪かった気がした。

「さあ、さあ、今日は、この位にして置きましょう。よく食べておくれだったね」

目の前の母親は、飯粒のついた薔薇いろの手をぱんぱんと子供の前で気もちよさそうにはたいた。

（注）

○蠅帳――蠅を防ぐために網を張った食品入れ。

○も一人の幻想のなかの母――子供は、家族のなかでも母が一番好きなのだが、ほかにもう一人の母がいるような幻想を

抱いていた。

問１　傍線部Ａ「ほら、鮨だよ、おすしだよ。手々で、じかに掴んで食べても好いのだよ」という言葉に、母親のどのような気持ちが表現されているか。最も適当なものを次から一つ選べ。

①　ひよわな子供がたくましく育ってほしいという思い
②　不器用な子供の苦労を省いてやろうとする思いやり
③　神経質な子供の気持ちを楽にしてやろうという心遣い
④　かたくなな態度をとる子供の反発を避けようとする気遣い
⑤　聞き分けのない子供にかみくだいて分からせてやろうという親心

問２　傍線部Ｂ「あたりを広く見廻したい歓び」とは、どのような歓びか。最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　自分の力でどんな物でも食べられるようになったという歓び
②　難しいことができたことを胸を張って示したいような歓び
③　もはや他人の目を気にする必要がなくなったという歓び
④　心が自由になって急に視野が広くなったような歓び
⑤　やっと獲得したものを周囲にも分かち与えたいような歓び

問３　傍線部Ｃ「子供は、そういうものへ却って愛感を覚え、自分で形を調えて食べると余計おいしい気がした。」とあるが、その気持ちの説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　母親が自分のために懸命に握ってくれた鮨が、不細工な形をしていることに、却って同情を覚え、自分で形を調えなおしていっそうおいしく食べようという気持ちになったのである。
②　不細工な鮨に、これまで神経質だった自分の姿が重なって、却っていとおしく思われ、さらに自分で形を調えることで

困難を克服する歓びまでが感じられるようになって、いっそうおいしい気がしたのである。

③　鮨の形が不細工なところに、却って食べ物を押しつけない母親の寛容さが感じられ、さらに自分で形を調えさせようとする母親の心づかいに気付き、鮨がいっそうおいしく感じられたのである。

④　子供の心をさそうように大きさを違えて握られた鮨の不細工さに、却って母親の愛情を感じ、それに手をふれて形を調えることで、母親の愛情が伝わってくるように思われ、いっそうおいしい気がしたのである。

⑤　母親の手で握られた不細工な鮨が、それまでの嫌悪感を覚えさせず、却って好ましさを感じさせ、さらに自分で形を調えることでより親しいものとなって、いっそうおいしく感じられたのである。

問４　本文を通して、母と子の関係がどのように描かれているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　苦手としていたものを自分の努力で克服していき、その新たな心の体験を言葉にはならない歓びとして体で表現するまでに成長をとげたわが子を、あたたかく見守りながら、あらためて母としてのさわやかな喜びをかみしめている母親の気持ちが、初夏の季節感と照応するように描かれている。

②　子供の気持ちをときほぐし励まそうとする母親の気持ちが、リズミカルな言葉づかいや、たしなめたりはやしたりする態度の抑揚を通して描かれ、さらに新たな体験を味わい、不安を克服していく子供の歓びと心のたかぶりが、そのまま母への親近感のふくらみに重なるように描かれている。

③　好奇心を刺激された子供が、新たな体験をくぐりぬけていくなかで、その心理の動きがしだいに外面的なものから内面的なものへと沈潜して、ついには無意識のうちに抱いていた母への嫌悪感や反発といった深層の心理を浮き彫りにするように描かれている。

④　子供のいやがっているものを時にはおどすような態度で無理強いする母親像が、しだいに子供の深層部分に入りこみ、それまで抱いていたやさしい理想的な母親像との間に微妙なくい違いを感じさせられ、それにとまどい、複雑な葛藤(かっとう)をみせる子供の心理の成長が描かれている。

⑤　好奇心を刺激したり、新たな体験を通して不安を克服する歓びを感じさせたりしながら、しだいに自分の思うような反

応を示してくれるわが子を見て、日頃子供が抱いていたと思われる母親像をも訂正させることができたと確信する、母親の限りない喜びがいきいきと描かれている。

第三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者＝岡本かの子（一八八九〜一九三九）跡見女学校卒・小説家。「芸術は爆発だ」と叫んだ芸術家の岡本太郎の母親。
この筆者は、二〇一四年度センター試験でも登場しています

語句

威丈高＝いたけだか→相手に対して威圧的。居丈高とも書く
cf 関連語……偉丈夫＝いじょうふ→体格の立派な、たくましい男
　　大丈夫＝だいじょうふ→人格的に立派な男・ますらお
　　虎の威を借る狐→権力や勢力ある人物の力をかりていばる小人物
葛藤＝かっとう→人間関係のもつれ、いざこざ。心の中の背反する欲求や感情の戦い

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）酢飯のほどよいサン味を確かめる　①参　②惨　③餐　④酸　⑤三

（イ）人生初の大きな冒ケンに出かける　①剣　②険　③健　④見　⑤顕

（ウ）広大な領地を征フクする　①福　②復　③服　④腹　⑤副

（エ）軍備の拡張競ソウに明け暮れる　①相　②送　③走　④争　⑤壮

（オ）形が整わないで不サイ工である　①菜　②細　③才　④裁　⑤栽

次の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）威丈高

①威圧するような　②背伸びして　③上から見下すように

④他人の権威を借りて　⑤近寄りがたく

（キ）きまり悪い

①決断力がない　②体裁悪く恥ずかしい　③周囲の目が厳しい

④潔さがたりない　⑤時間の都合がつかない

（ク）掠める

①強く香る　②一瞬よぎる　③有無をいわせない

④からめとる　⑤脇に押しのける

第三講《小説1》ビフォア・アフターの対比

《本文の対比構造》

母親の「鮨」以前

子供（前半）

魚や肉を食べると身が穢れるような気

（心理的な抵抗感）

「気味悪く～冒険～詰めていた息のようなもの～脅かされ～」

主な対比

母親の「鮨」以後

母親・子供（後半）

一つの気持ちの痺れた世界

母親がつくる鮨への愛感

《解説》

「はじめてのお使い」なんてタイトルのテレビ番組がありました。小さな子供が、生まれてはじめて、自分一人で「お使い」に行き、ちょっとだけ成長する、変化する、ちらっと大人の表情を見せるというものです。こういう転機・変化のきっかけになるものを〝通過儀礼〟〝イニシエーション〟と呼ぶことがあります。七五三とか元服とか成人式とか。ほかにも新入学や卒業、就職、結婚なども、それ以前それ以後で心のあり方が変化するという点で通過儀礼ですね。今回の小説もそう。お母さんが握ってくれた「鮨（タイトル！）」を契機に、子供の心理が変わります。こうした、ある出来事をつうじて主人公が変化するストーリーは大変多く、大学受験現代文の小説問題でも何度も登場しています。こうしたタイプの文章を〝ビフォア・アフター型〟と呼んでいます。そしてこの〝ビフォア⟷アフター〟で対比をつくります。

問１《傍線部説明》

お母さんは、「みな買い立ての真新しい」道具を用意し、また「使う道具は、みんな新しいものだよ。それから拵（こしら）える人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗ってあるよ」としっかり語って聞かせています。それほど気を使って、子供の心を解きほぐそうとしています。前書きにもあるとおり「魚や肉などを食べると身が穢（けが）れるような気」がする子供の心理をほぐそうとしているのです。そう〝心理〟です。アレルギーとかの生理身体のレベルや物理的なものではありませんからね。したがって③が正解。それなのに①は「ひよわ⟷たくましく」という物理的身体レベルになってしまっています。鮨じゃなくプロテイン飲んで筋トレしろよ、と言いたくなります。こういうのを物理的スリカエと呼びます。大学受験現代文小説ではおなじみの誤りパターンです。また同時に正しい対比喪失の誤りでもあります。正しい対比は「心理的抵抗感⟷母親による解消」です。②は「不器用」が物理的スリカエです。手先・指先の繊細さの話じゃありません。④と⑤は「かたくなな態度」「反発」「聞き分けのない」が×です。これじゃ言うこと聞かない〝きかん坊〟〝わがまま小僧〟の話になってしまいます。これも物理的スリカエですし、正しい対比喪失の誤りでもあります。

問２《傍線部説明》

お母さんの心遣いと周到な準備、考え抜かれた順番（玉子焼き鮨→イカ→鯛やヒラメなどの白身魚（シメサバではハードル高すぎだもんね）によって、食べられないと思っていたものを食べられるようになっています。できないことができるようになる喜びを比喩的に表現しているのが傍線部です。したがって②が正解です。①は、まず「自分の力で」が×。盗人猛々しい！（盗んでないけど）とにかく、ずうずうしいにもほどがあります。お母さんの支援あってこそです。記述に反する誤りです。また「どんな物でも食べられる」が絵にかいたような不当な全称判断です。くさやの干物もホヤ貝もブルーチーズもドリアンも食べられるのか、とツッコミたくなります。このように本文に根拠なく、「すべての・あらゆる」とやってしまうのが、不当な全称判断です。③は「もはや他人の目」が×。以前も以後も「他人」など出てきません。親子関係内ですよね。〝お母さんの後ろに誰かいるよ、こっち見てるよ〟って怖いよ。比喩の誤解ですし、正しい対比喪失の誤りと言ってもよいです。④はまず「自由」が×です。前半「拘束」「束縛」があったわけではありません。正しい対比喪失です。さらに「視野が広くなったような」は比喩の誤解です。達成感を「あたりを広く見廻したい」と表現しているだけです。⑤は「分かち与え」る、「周囲」というようにまた他人が登場して×です。記述に反する誤りとも言えますし、比喩の誤解とも言えます。

問３《傍線部説明》

お母さんは「素人」ゆえに握る鮨は「大きさが違って～不細工」です。子供がそういうものに「愛感を覚え～形を調えて～余計おいしい」と感じる理由は、お母さんとの一体感です。「母と子を～一つの気持ちの痺れた世界」とあるように、「鮨」を通して母と子と心の一致・近さ・親しみを表現しています。ウェディング・ケーキにナイフを入れるのが、〝新郎新婦、最初の共同作業です〟などと披露宴でアナウンスされるように。というわけですから、⑤が正解です。とくに「それまでの嫌悪感」から「好ましさ」「親しいもの」への変化は正しいビフォア・アフターの対比を抑えた完璧な答えです。①は鮨の「不細工な形」に対し「同情」してますね。いつのまにかこの子供、上から目線になってお母さんのことを「同情」しています。盗人猛々しいとはこのこと（盗んでないけど）。同情されているのはむしろ、この子供ですよね。こんな立場逆転は記述に反する誤りと言ってもよいし、〝同情される側→同情する側〟という正しい対比喪失の誤りとも言えます。②は「不細工な鮨」に「これまで神経質だった自分」

を重ねていますが、対比混乱の誤りです。傍線部Cは〝アフター〟です。それなのに変わる前の自分〝ビフォア〟の内容で説明してしまいました。ね、対比で読めているかどうか、こういう選択肢で試されているのだよ。さらに自分の姿を鮨に投影して「いとおしく」では、自己愛主義のナルシストだよ。お母さんとの一体感だからね、ここは記述に反する誤りでもあります。さて③の「自分で形を調えさせようとする母親」と④の「子供の心をさそうように大きさを違えて」は共通して×です。お母さんは「素人」だから形が違うのでしたね。意図的な技巧ではありません（食べ物で遊んじゃいけません！）。記述に反する誤りです。

問４《全体の理解》

①は「自分の努力で克服」が×。また出たよ、盗人猛々しい（盗んでないけど）。お母さんの助けです。記述に反する誤りです。さらに「体で表現するまでに成長」ですって。〝パフォーマーとしてデビュー以前以後〟かよ。これを正しい対比喪失の誤りと呼ばずしてほかに何と呼ぼう。③と⑤はともに「好奇心」が×です。本文中の「冒険」を文字通り〝前人未到のアドベンチャー〟〝未知の開拓者〟ととった比喩の誤解であり、文脈喪失の誤りです。この子供にとっては食べられないと思っていたものを食べることが「冒険」なのでした。③はさらに「心理の動き」について「外面的なものから内面的なものへ」とおかしな〝ビフォア・アフター〟になってます。そうです、仕組まれた正しい対比喪失の誤りです。〝仕組まれた〟は、言い過ぎですが、こうして間違った選択肢を意図的につくっているのです。そうした間違いの特徴に馴染めば、入試現代文の得点力は、とても上がるのだということがわかるよね。④は「おどすような態度」「無理強い」がいきなり×です。鬼母か！　本文は「怖くない程度の威丈高」でしたよ。子供が尻込みしたりすると、背中を押したということです。はげましであって、虐待が疑われる事例じゃありません。記述に反する誤りです。さらに「それまで抱いていたやさしい理想的な母親像との間に微妙なくい違いを感じさせられ」もしらじらしいほどの記述に反する誤りです。むしろ「一致」「重なり」です。⑤は、先の「好奇心」以外の×として「自分の思うような反応を示してくれるわが子」が挙げられます。〝言うこと聞かない⟶言うこと聞く〟という〝ビフォア・アフター〟じゃありません。操り人形化か！　正しい対比喪失の誤りです。加えて「日頃子供が抱いていたと思われる母親像をも訂正」もいけません。記述なしと言ってもよいし、あるいは、訂正したのはあくまで魚や肉を食べられないという心理的抵抗感だと考えれば、正しい対比喪失の誤りです。したがって②が正解。「子供の気持ちをときほぐし」なんて、完璧です。

模範解答

問1＝③

問2＝②

問3＝⑤

問4＝②

復習問題　解答　第三講

（ア）④　（イ）②　（ウ）③　（エ）④　（オ）②

（カ）①　（キ）②　（ク）②

解答漢字一覧

（ア）酸味　（イ）冒険　（ウ）征服　（エ）競争　（オ）不細工